

C年特定18 ルカ14章25―33節

〔直訳〕

25 だが、共に旅をしていた 彼と 多くの群衆が、  
そして 振り向いて

彼は言った 彼らに向けて、

26 「もし 誰かが 来る 私に向けて

そして 憎まない 自分の父を そして 母を

そして 妻を そして 子どもたちを

そして 兄弟たちを そして 姉妹たちを

さえも また 自分の魂を、

できない であることが 私の 弟子。

27 誰でも 運ばない 自分の十字架を

そして 来る 私の後を、

できない であることが 私の 弟子。

28 なぜなら、あなたがたのうちの誰かが

望んだとき 塔を 建てることを

ないだろうか 初めに 座って 計算する 費用を、

かどうかが 彼は持つ 完成の中へと、

29 さもないと

置いても 彼が 土台を

そして 力がないので 仕上げるための、

すべての 見ている人たちが 始める 彼を 嘲笑うことを

30 言いながら 次のことを、

「この 人は 始めた 建てることを

そして 力がなかった 仕上げるための。」

31 あるいは 誰か王が

出で行くとき 他の王と 会うために 戦いの中へと

ないだろうか 座って 初めに 熟慮するだろう

かどうかが 彼はできる 一人人で 出会うことが

二万人と共に 来る人に 彼へと。

32 さもないければ、

まだ 彼が 遠くに いる間に

使者を 派遣して

彼は求める 平和に関することを。

33 だから、このように あなたがたのうちのすべての人は

ところの 決別しない 自分に属するすべてのものに、

できない であることが 私の 弟子。

〔新共同訳〕

25 大勢の群衆と一緒に来て来たが、イエスは振り向いて言われた。26 「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。27 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。28 あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。29 そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、30 『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。32 もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めよう。33 だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

①構成

②5節 十字架が待つエルサレムへの旅の途中、イエスは「振り向いて」、群衆に語りかける。

③26―27節 どちらの節も「私の弟子であることができない」で終わっているから、節の前半に弟子の条件が書かれているはずである。その動詞は次のようになる。

私に向けて来る  
憎まないなら  
運ばない  
私の後を来る

最初と最後の表現からみて、この四つの動詞は一連の動作を表している。26節と27節は別々の二つの条件を書いているのではなく、一つの条件を表している。

④28―32節 この二つのたとえは次のように同じパターンで作られている。

28―30節	31―32節
望んだとき	出て行くとき
ないだろうか	ないだろうか
かどうか	かどうか
さもないと	さもなければ

このように対になっているから、どちらのたとえにも登場する同じ表現があれば、その表現こそがたとえのポイントであるはずである。どちらのたとえにも使われる表現は「初めに座って」であるから、この表現がたとえの要点となる。

⑤33節 この節も「私の弟子であることができない」で終わっている。この段落は28―32節の対になったたとえを受け、弟子となるためには「決別する」ことが不可欠なことを強調する。

②旅の途中で(25節)

① ルカ9章51節に「イエスは、天に上げられる時期が近づく、エルサレムに向かう決意を固められた」とあるように、ここで言及される旅はエルサレムでイエスを待つ十字架に向かう旅である。イエスはその途上で「振り向いて」、群衆に語る。

② 「共に旅をしていた」。ルカは動詞「旅をする(ポレウオマイ)」を用いて、イエスのエルサレムへの最後の旅路を表している(九51―53・56・57、一三33、一七11、二二22・39)。9章51節に「天に上げられる時期が近づく」とあるように、イエスはエルサレムで自分を待ち受ける運命を熟知している。ここでは、「共に旅をする(シユンポレウオマイ)」という合成動詞が用いられている。群衆はイエスと共に旅をしている。主語は「群衆」であり、彼らがイエスの旅に自ら加わっていることが示されている。しかし、ただ共に旅をするだけではイエスの弟子であることはできない。

③ 「イエスは振り向いて」。この表現はルカでは七箇所に見られる(七9・44、九55、一〇23、二二61、二三28)。たいていは、この表現に続いてイエスの語った言葉が述べられ、物語が一つの頂点に達したことを表すと同時に、後に続くイエスの発言に注意を喚起する役割をもっている。

③弟子の条件(26―27節)

④ それぞれの節の前半に弟子の条件が書かれており、そこに使われた動詞を再確認すると、

私に向けて来る ↓ 憎まないなら ↓ 運ばない ↓ 私の後を来る

となる。最初の「私に向けて来る」と最後の「私の後を来る」は一つの流れを表す動作であるから、この四つの動詞は別々の動作ではなく、一つの流れのもとにある動きを表し、「イエスに向けて来て、憎んで、運んで、後を来る」の意味だと言える。しかも、最初と最後の動詞が肯定形で、間の二つが否定形なのが注目を引く。「私に向けて来て、私の後を来る」としても、家族や自分の魂をも「憎まず」、自分の十字架を「運ばない」なら、弟子ではない。イエスに従う群衆は「憎んで、運ぶ」ことをまだ知らずに、ぼんやり後をついていただけなのかもしれない。イエスは「振り向いて」、「憎んで、運ぶ」ことの重要性を彼らに教える。

⑤ 「憎む」と訳された動詞は、「少なく愛する」の意味でも使う。近東では、比較の概念を表すために、対立概念を用いることがある。ここでの「憎む」は、マタイ10章37―39節(「わたしよりも父や母を愛する者は……」)に照らして理解するのがよいかもかもしれない。その場合、「家族や自分の魂よりもイエスを愛する」の意味になる。この「憎む」をどのように解釈するにしても、弟子に求められているのはイエスと同じように「十字架を背負う」ことである(九57―62参照)。ここでは憎むべき対象から「夫」が抜けているから、家族も自分の魂をも憎めと呼びかけられているのは、夫であるだろう。

⑥ 「自分の十字架を運んで、私の後を来る」。「後を来る(ついて来る)」は、ラビの弟子になることを表す用語としても使われる。しかし、ここでは「十字架を背負って」とあり、そこにイエスの弟子の特徴があると言える。「家族と自分の魂を憎み、自分の十字架を背負う」ことが求められる。

⑦ 「魂(プシューケー)」は、古典ギリシア語での原義は、生き物の「息・呼吸」。さらに、動物や

人間を生かす生命原理を表し、「魂・生命」を意味する。プシユケーが人間に使われれば、感情・感覚・知性の座としての「心」や、肉体と区別された「靈魂」を意味する。七十人訳はプシユケーをヘブライ語ネフェシユの訳語として使う。ネフェシユは「のど・気管」を意味し、「のど」に象徴される人間の「欲求・切望」、思い・感情の座としての「心」、さらには生きることを切望する存在である人間全体を表す。そのような人間は神を求め、神によって満たされる存在でもある。新約聖書もこうした七十人訳の用法を受け継いでいる。26節の「魂」は多くは「命」と訳されるが、「欲求・切望」、欲求や感情を含めた「心」の意味も考えられる。

④ここでの「十字架」は、殉教の覚悟そのものというよりは、その覚悟にもとづく日常生活の中で実現すべき態度であるだろう。9章23節でイエスは弟子だけでなく、「皆に」向けて、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と命じている。その十字架は「日々」負い続ける十字架である。従って、殉教を指すのではなく、イエスを追うことがもたらすさまざまな困難を意味している。14章27節でもイエスが振り向いて語りかけているのは「多くの群衆」である。また、「憎んで、十字架を運ぶ」という流れの中で捉えるなら、27節の十字架は、家族や自分の魂よりもイエスを愛するという態度と深く関わるものであり、殉教を指すのではないだろう。

#### ④対になったたとえ(28―32節)

①この二つのたとえは対になったたとえであり、どちらのたとえにも登場する「初めに座って」が、たとえの要点になる。塔を建てたり、戦争に訴えようというのだから、しなければならぬ準備は山ほどある。しかし、それを「すべて捨てておいて、初めに座る」ではないかと説くのがこのたとえの目的である。だから、続く33節は「だからこのように」と始めて、すべてのものと決別する(捨てる)ことが弟子に必要な態度だと述べている。

#### ⑤決別(33節)

①ここでの「自分に属するすべてのもの」とは、「持ち物」だけではなく、自分の所有であり自由にできると思っているものを指す。26節、27節、33節に「私の弟子であることはできない」が置かれていることを考えると、33節は26節と27節で語られたイエスの弟子であるための条件をまとめる言葉であると思われる。そうであるなら、「自分に属するすべてのもの」とは「自分の家族と自分の魂」であり、自分の思いのままにできると思い込んでいるそれらすべてと「決別する」ことが求められているのだろう。

#### ⑥イエスと共に十字架を背負う

①27節の負うべき「自分の十字架」とは、自分の所有として支配しているすべてのもの、自分と家族に対して持っている欲求や感情をも放棄して生きるときに起こる困難や苦しみである。「憎み、十字架を運び、決別する」という覚悟が、イエスの弟子であろうとする「すべての人」に求められている。自分の欲求や感情を捨てるとき、人はありのままの自分を受け入れ、他者に仕えることができるようになる。すべての人を生かすために十字架を担ったイエスに従う者は、そのイエスを愛することによって、自らも仕える者として生きることになる。